

「果物王国」岡山の昔と今

岡山大学農学部

久保田 尚浩



岡山には『「果物王国」岡山』という言葉がある【写真1】。その由来は定かでないが、この言葉が使われるようになったと思われる昭和30～40年頃、岡山県の果実生産量はモモが全国第1位、ブドウが第2位であった。これ以降果実生産は減少し、現在ではモモが第5位、ブドウが第4位にまで低下した。しかし、『「果物王国」岡山』という言葉がなくなる気配はない。ここでは、岡山における果実生産の昔と今を紹介したい。

明治になって岡山に導入された‘上海水蜜桃’から多くのモモ品種が生まれた。すなわち、‘白桃’を筆頭に‘大久保’‘清水白桃’‘高陽白桃’‘砂子早生’‘紅清水’‘瀬戸内白桃’などが相次いで発見・育成され、平成になってからも‘華清水’‘白麗’‘おかやま夢白桃’などが育成されている。全国的に、昭和50年代までは‘大久保’の生産が最も多かったが、現在では‘白鳳’やその系統の‘あかつき’‘日川白鳳’な



【写真1】「果物王国」岡山を代表するモモとブドウ
(左から‘白桃’‘清水白桃’‘マスカット・オブ・アレキサンドリア’‘ピオーネ’)。

どが主流になっている。しかし、岡山では‘清水白桃’‘白桃’‘大和白桃’など、品質が最もよいとされている白桃系品種の栽培が多く、全国の5割余を生産している。岡山は西南暖地に位置するため害虫の発生回

数が多い。その被害を防ぐため果実の成長期間を通して果実袋を掛けているので（有袋栽培）、果皮が乳白色をしている【写真2】。

ブドウも明治以来多くの品種が輸入され、栽培が試みられるとともに‘巨峰’や‘ピオーネ’などの四倍体品種が数多く育成された。岡山で育成された品種として、古くは‘ネオマスカット’や‘ヒロハンプルグ’、近年では‘オーロラブラック’や‘瀬戸ジャイアンツ（桃太郎ブドウ）’がある【写真3】。かつては‘キャンベルアーリー’現在では‘ピオーネ’の生産は岡山が全国一である。岡山が9割以上を生産している‘マスカット・オブ・アレキサンドリア（マスカット）’は、乾燥地が原産のため当初はうまく栽培できなかつたが、ガラス室で栽培するとよいことが分かり、爾来120年にわたって生産されている。‘ピオーネ’は、短梢剪定による強い新梢成長とジベレリン処理に

より種子のない高品質の果実生産が可能なことから全国に急速に普及したが、4割余は岡山で生産されている。

岡山は、明治以降多くの人の努力によって全国有数の果樹産地に発展し、『果物王国』岡山という言葉も生み、芸術品と称されるほどのモモとブドウを生産してきた。このため、岡山の果物は高価であるとの印象が強い。事実、岡山産のモモの平均単価は他県産の2倍近い。‘マスカット’や‘ピオーネ’も最も高価なブドウである。これは、岡山で生産される果物がブランド品として高く評価されている証拠である。生産量は減少したものの、モモやブドウの中でも最も高級な品種の生産は今なお岡山が全国一であるというある種の自負のようなものが『果物王国』岡山という言葉を支えているように思われる。



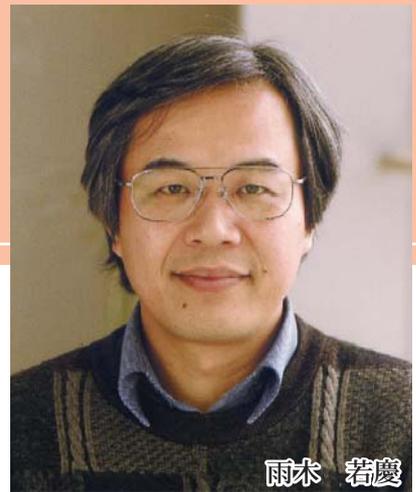
【写真2】山梨県産(左)と岡山県産(右)の‘白鳳’、果実袋を掛けた状態(下)。



【写真3】岡山で育成された‘オーロラブラック’(左、岡山県農試提供)と‘瀬戸ジャイアンツ’(右)。

茅ヶ崎海岸の環境保全を 目的とした海浜植物の増殖

東京農業大学農学部 雨木 若慶
NPO法人 ゆい代表 荒井 三七雄



雨木 若慶

ハマボウフウの増殖

東京農業大学の雨木の研究室ではさまざまなテーマの研究を行っており、光質と植物の成長・開花に関する研究についてはニュースレターNo. 31に掲載していただいた。今回は地元神奈川県でNPO法人と共同で行っている海浜植物の増殖に関する研究を紹介したい。

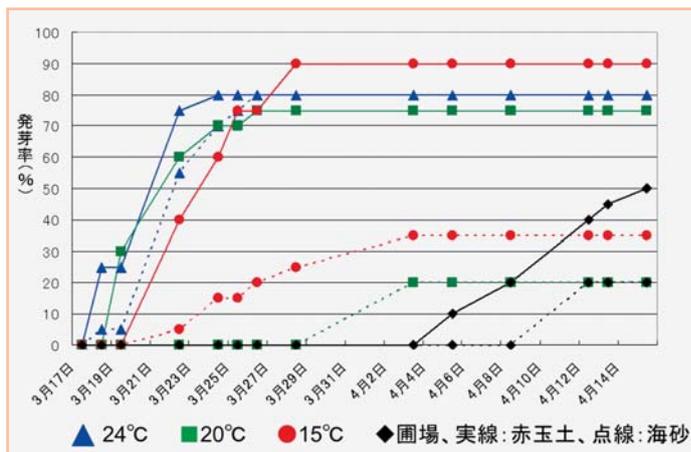
箱根駅伝3区、8区で毎年映る防砂林が有名な茅ヶ崎海岸は開発が進み、そこに自生する植物も絶滅に瀕しているものが多い。これらの海浜生態系を守り、次世代に継承していくことを目的に設立されたNPO法人が「ゆい」である（URL：<http://www.dualbalance.net/npoyui/>）。ゆいと共同で行っている海浜植物の増殖については、県の絶滅危惧種となっているラン科植物のクゲヌマラン、ハマカキランの無菌播種、また、飛砂を抑えて海浜環境保全に寄与しているコウボウムギ、ハマボウフウ、ハマヒルガオなどの播種および組織培養による増殖の研究を行っている。茅ヶ崎海岸は冬期に強い季節風が海から吹上げるため、海岸の景観が一変するほど飛砂が激しい。自然の中でこれを抑えているのがコウボウムギやハマボウフウなどの海浜植物である。コウボウムギは長い地下茎をも

ち、30～40cmの厚さの砂を被っても平気でシュートを伸ばし、葉、根を広げて砂を抑えてしまう。ハマボウフウも少々砂が被っても逞しくシュートを上へ上へと伸ばし地上部を展開する。これらの植物を利用して海浜環境の保全を図るには、種子発芽の条件や増殖方法を明らかにする必要がある。今回は、これらの研究の中からハマボウフウの増殖に関する研究を紹介する。

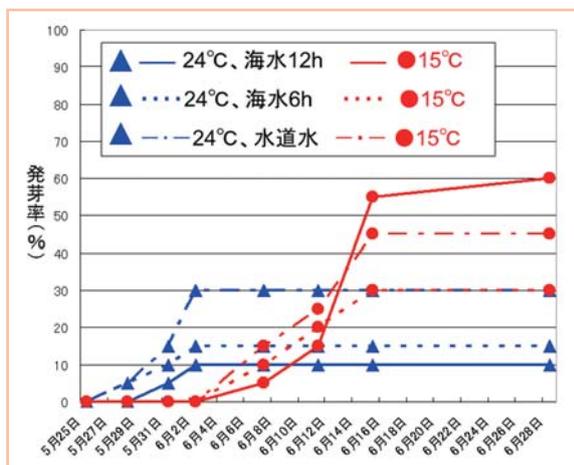
よくあることだが、自然にある植物を種子繁殖しようとする、通常の方法で播いたのでは殆ど発芽してこない。2007年に海岸で自生するハマボウフウから種子を採取し、そのまま播種したところ発芽率は0%だった。水道流水下に種子を24時間浸漬すると数%の発芽がみられ、さらに8週間の冷蔵処理（3℃）を行うと30～50%発芽した（データ省略）。これらの結果から、ハマボウフウの果皮または種皮には発芽阻害物質が含まれ、また胚の休眠も深く、打破のためには約2ヵ月の低温処理を要することが明らかになった。この流水浸漬・低温処理を行って、播種用土、発芽温度、播種時期を比較した結

果が【図1】、【図2】である。【図1】は3月に播種した。海岸に自生するハマボウフウだが海砂よりも赤玉土の方が全体的に発芽率が高く、露地においた場合は4月に入ってから発芽が始まったが、インキュベータを用いた場合は24℃が最も早く3月中旬より発芽した。ただし、最終的な発芽率は15℃の方が高かった(【図1】)。【図2】は、赤玉土に5月播種したものだが、海水浸漬しても発芽阻害はみられず、【図1】と同じく発芽開始は遅れるものの最終発芽率は15℃で高かった。ただし、3月播種では75~90%の発芽率だったのに、5月播種では最大でも50%程度と発芽率が低下した。休眠深さの推移など、今後検討の必要がある。

流水浸漬・低温処理した種子から胚を摘出して植物ホルモン無添加のMS培地に植えると無菌実生を得ることができる。自生地ではさまざまな個体変異がみられるため、ハマボウフウを営利栽培しようとする場合はクローン増殖技術が必要となる。得られた無菌実生の各部位からの増殖を試みたところ、根茎(胚軸)を1mm厚と薄くスライスした切片でも不定芽を再生することができた【図3】。ゆいでは、障害者自立のための農園開設を目標としており、軽量で作業が容易なハマボウフウ栽培を想定している。農園実現までには、ハマボウフウの培養苗生産技術を是非完成させたいと考えている。

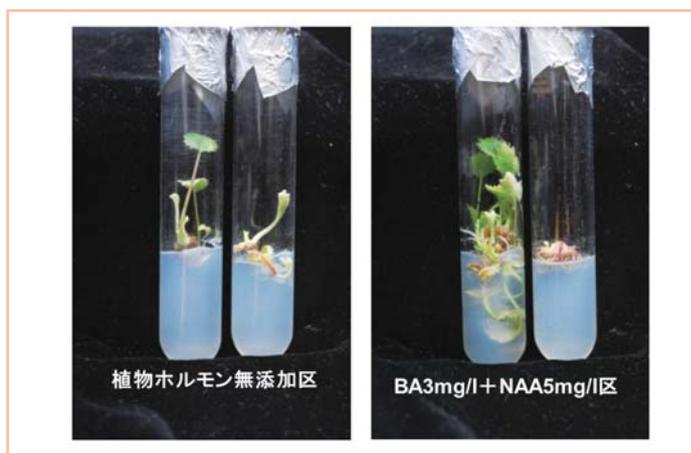


【図1】ハマボウフウ種子の発芽率に及ぼす栽培温度、用土の影響



【図2】ハマボウフウ種子の発芽率に及ぼす海水浸漬と栽培温度の影響

(2010年4月3日浸漬処理、2010年5月15日播種)



【図3】ハマボウフウの根茎横断切片(厚さ1mm)の培養による不定芽形成に及ぼす植物ホルモン添加の影響(培養開始10週間目)

タイタンビカスの育種

(株)赤塚植物園 藤森 忠雄
(株)赤塚植物園 倉林 雪夫



「タイタンビカス」は、モミジアオイとアメリカフヨウの種間雑種から育成した、新しい大型宿根草です。最近、当社で育種したこの植物の特徴、育種の経緯、交配、将来の展望などについて、以下に述べてみます。

タイタンビカスの特徴

ひと夏で2m近くに成長する大型の植物で、モミジアオイやアメリカフヨウに比べ、分枝性が非常に強いのが特徴です。冬期は完全に地上が枯れてしまう落葉型の宿根草で、4月から伸び出す主幹の伸長に伴って、次々と枝を出し、ピラミッド状に成長します。花は朝開き、夕方には閉じてしまう1日花ですが、夏から秋にかけて連日のように咲き続け、しっかりした株であれば、1株で秋までに200輪以上もの花を咲かせてくれます。開花のピークは8月の中旬頃で、下旬頃には一時花を休むことがあります。その後

10月頃まで断続的に咲き続けます。

花は直径20～22cmと大きく、5弁花で丸く整った形をしています。光沢感のある美しい色彩が最大の特徴で、実は育種の目標の一つがそこにありました。アメリカフヨウは、花は大きいけれど花弁に光沢が無く、どこかアカ抜けない印象があります。そこに、光沢のある花弁を持つモミジアオイの血を加えることで、澄んだ色調の美しい花が実現しました。現在までに登録して発表した品種は次の4個体です。



ブライトレッド

輝くような赤紅色の花色は強烈で大変に目立ちます。花は他の3種に比べやや小さいですが、丸弁で整った形をしています。



ピーチホワイト

ほんのリピンク色を含んだ白色で、非常にさわやかなイメージの花です。花も大きく、枝もしっかりしています。



ピンク

明るく透き通るようなピンク色でやさしい雰囲気のある花です。やや細枝ですが、たくさん咲いてくると、とても華やかになります。



ローズ

落ち着いた色合いのローズピンクで、しっとりとした雰囲気があります。4種の中では草姿はやや小柄なので、鉢植えにも向きます。

ジャパンフラワーセレクション (JFS) 入賞※

2009-2010 JFS 夏花壇の部において4品種とも入賞し、さらに日本フラワー・オブ・ザ・イヤー2009花壇部門において2品種が特別賞を受賞しました。

JFSにて以下のような講評をいただきました。

「草丈が高く枝張りも多く出るだけでなく、花はハイビスカスの印象に近い花型で、花色も鮮明で美しく、葉はモミジ葉で新奇性があり、これまでのアメリカフヨウのイメージとは一線を画する新しいカテゴリーの品種であるとして評価された。鮮明で光沢のある大きな花がぼっと

咲いている姿は、実際に現物を目の当たりにすると、今までにない強いインパクトを受ける。特に『タイタンビカス ブライトレッド』の輝くような赤紅色の花色は鮮明で美しい。」

植物の特性や花色、更に葉の形状等が新しいカテゴリーの品種として大きな評価をいただけたのは、育種者として、大変に嬉しいことでした。

※JFSについては9ページで詳細を説明します。



育種の経緯 育種親について

モミジアオイ

北米原産の宿根草で、100～150cmほどに伸びた莖に8月から9月にかけて花を咲かせます。葉と花の形に特徴があり、深く掌状に別れた葉の形はまさにモミジのようです。光沢のある暗紅色の花も花弁が細く風車のように、落ち着いた和風の印象があり、日本画の題材としても好んで取り上げられる植物のひとつです。



モミジアオイの葉

株元から立ち上がる莖はほとんど枝を出さないで、スリムな株姿になるのが特徴です。

アメリカフヨウ

昔から大輪の花を咲かせる宿根草として有名で6月から7月頃にかけて花を咲かせます。莖は80～120cmほどに伸びますが、あまり枝を出さず、楕円形の葉は全縁で切れ込みはありません。北米原産の数種の原種を元に作られた園芸種ですが、品種としては「ディスコベル」とか、「サウザンベル」と言った種子系の品種ばかりで、どういうわけか、栄養系の品種が確立されていないようです。花は巨大で直径25cmになるものもありますが、知られているわりに日本ではあまり人気がないのが実情です。赤系の色彩に曇りが抜けず、澄んだ色調の赤い花が無いためかと思われます。また、花型

も完全な丸型になり、ほとんど平らに開くため、花らしさを感じなくなっています。



アメリカフヨウの葉

より大きく、より丸く、より開く、といった改良が進みすぎたため、花としての面白さを失ってしまったような感じがあります。

平尾ハイブリッド (仮称)

実際に種子親として使った個体は、故平尾秀一氏が作られたと思われるもので、「平尾ハイブリッド」と仮称しています。流通はしていませんが、正体不明のまま色々なところで植えられていて、モミジアオイと混同されていることが多いようです。インターネット上のサイトでも、モミジアオイとしてこの植物が紹介されているところも多く存在します。

花はローズ色を帯びた輝くような緋紅色で、花の形はちょうどアメリカフヨウとモミジアオイの中間的な形で、花弁は一部オーバーラップする程度で隙間が多く、モミジアオイの面影を残しています。非常に強勢な植物で分枝性が強く、枝を出して高さ2mほどの大株に育ちます。アメリカフヨウに比べ花は小さめですが、桁違いにたくさんの花を咲かせてくれます。

昔のガーデンライフという雑誌の対談記事の中で、モミジアオイとアメリカフヨウの交配で作られたと書かれていたのを記憶しています。

実際の交配

最初に行ったのは、この平尾ハイブリッドに赤花のアメリカフヨウを掛け合せた交配です。アメリカフヨウは、花は大きいけれど色彩に冴えがなく、いまひとつ魅かれるものがありません。また葉も浅い緑色で光沢もなく、全体的に安っぽい草花という印象を免れません。両者を掛け合せた子供の中に大きな花を咲かせ、葉も切れ込みのある上品な形状のものがいくつか生まれ、その中から特に整型で印象的な目立つ花色を残したものが今のタイタンピカス・ブライトレッドです。

更に色幅を広げるべく、白花のアメリカフヨウを使って交配し、そこから生まれたのが、ピンク、ピーチホワイト、ローズの3種類です。実はこのとき、葉の形状は非常にばらつき、ほとんどアメリカフヨウに近く全縁のものからモミジアオイのように深く分かれるものまで様々な個体が生じました。その中で、できるだけアメリカフヨウと区別性を持たせたかったのと、枝が茂っても軽やかさを感じることができ、なおかつボリューム感も感じるよう、適度な分かれ方の葉を選抜しました。JFSでは、葉の形についても新奇性を認めていただき、大変に嬉しく感じた次第です。

将来の展望

大型の宿根草として注目されているタイタンピカスですが、現実には大きすぎるという声もあるので、ややコンパクトなタイプを求め、新たに交配を進めています。目標としては1.5mほどで、目の高さ程度で止まってくれるものが良いので

はないかと思っています。2mを超えるというのは確かに大きすぎるかもしれませんが、あまりにもコンパクトにしすぎても、魅力がなくなってしまうと思っています。

色幅については、更に濃い黒紅色のものや、ピロードのような深い赤、美しく濃いピンクや、赤またはピンクのバイカラーなどが考えられます。すでに今年の実生株の中に、新しい色合いのものも多数生まれているので、近いうちに新品種として発売できるものと思っています。

黄色は多くの人から期待される花色なのですが、これは今現在、交配親和性のある原種が存在しないため、不可能に近いことと思われれます。しかし、もし実現できたら一気に色幅が広がり、タイタンピカスの園芸的価値は飛躍的に上昇するものと思っています。遠い夢ですが、いつかは実現してみたいものです。

(文章：倉林 雪夫)



ジャパンフラワーセレクション (JFS) とは

Japan Flower selection



いい花の新基準。

JFSは、2006年4月からスタートした日本における統一的な新品種のコンテストです。世界の新品種コンテストとしては、北米を中心とした全世界的なオールアメリカセレクションズ (AAS)、ヨーロッパを中心としたフロロセレクト (FS) が在りますが、アジア発、日本発の新品種コンテストは、このジャパンフラワーセレクションがはじめてです。

ジャパンフラワーセレクションは、国内外の新品種の中から、消費者に推薦できる優れた品種を選んで「生活者の花や緑のあるライフスタイルを質的に向上させる」「新品種の開発・導入の水準を向上させる」「花き産業の発展を図る」を目的に、花き産業関係者の幅広い参加・協力、農林水産省等の後援を戴き、「ジャパンフラワーセレクション」を創設し、2006年春からスタートしました。

国内の花き業界を代表する学識者、フラワーデザイナー、花の市場関係者が公正な視点で専門的に選びます。

※農林水産省の平成17年「花き産業振興方針」に則した事業のひとつです。

主催：「ジャパンフラワーセレクション実行協議会」

(2005年10月21日設立)

後援：農林水産省

協力：社団法人 日本花き生産協会

社団法人 日本花き卸売市場協会

社団法人 日本生花商協会

社団法人 日本生花通信配達協会

社団法人 日本インドア・グリーン協会

社団法人 日本種苗協会

社団法人 日本フラワーデザイナー協会

日本園芸商協会、日本花輸出入協会、全国新品種育成者の会

ジャパンフラワーセレクションの目的

- (1) 優れた新品種を生活者へ推薦
- (2) 日本における新品種の情報収集・発信
(受賞品種に関する情報データベースをウェブサイトで公開しています。)
- (3) その成果を国内外の消費者や生産者、流通関係者へ積極的に発信します。
- (4) さらなる新品種の開発・導入を推進します。
- (5) 新品種を切り口とした需要拡大を目指します。

■ JFS のホームページから引用 <http://www.jf-selections.net/jfs/intro.html>

ジャパンフラワーセレクション実行協議会
財団法人日本花普及センター 内

東京都中央区東日本橋 3-6-17 山一ビル 4F
TEL : 03-3664-8739 FAX : 03-3664-8743

かねや
兼弥産業株式会社

兼弥産業株式会社 青山 兼人



I P P S - J に入会して以来、様々な経験をさせていただきました。今回は、この場をお借りして少し、私の所属しております、兼弥産業(株)についてご紹介させていただき、10月24日～25日に開催されるI P P S - J 愛知大会の知多コースに参加される方の豆知識としても読んでいただければと思います。

自社ブランドの立ち上げ

兼弥産業(株)の前身は、“漁師”から水産加工に転換した時につけられた“兼弥水産”がもととなります。当時は煮干やちりめんじゃこの加工を主に行っていましたが、水産物の水揚げ量減少に伴い、1969年8月から射出成型機を導入し、水産加工とプラスチック成形業の併用からスタートしました。当初は、雑貨品、電気部品、自動車部品などの下請け成形からはじまり、本格的にプラスチック成形会社として、“兼弥産業株式会社”としてスタートしました。

様々な下請けのプラ製造から模索し、1974年6月から、プラスチック製植木鉢の製造をはじめ、自社ブランドとして立ち上げたのはこの頃です。鉢物生産者に特化し、一軒一軒訪問し販売していきました。現在の基礎基本となる原点です。

兼弥産業(株)は今期で40期をむかえます。

この40年は経済ならびに我々の市場分野も大きく変動しています。実際、当社の主力製品のプラスチック植木鉢・トレーの比率も大きく変動し、培養土、種苗、ハウス部材関連資材、切花バケツ流通(ELFシステム)など、事業分野の分布が大きく変化しています。特に、近年の10年～15年の変化は多様です。

健康な根を促すスリット鉢

植木鉢の分野ではスリット鉢が主力で提案させていただいております。デフレ経済の中、低コスト時代ではありますが、植物の栽培においては、植物製品のロスをいかにおさえるかという観点から商品開発を進めております。

スリット鉢は、健康な根を促すことにより、



健康な植物栽培、栽培期間の短縮化、肥料・農薬などの軽減、植物品質ボリュームの向上などが上げられます。近年では、予防消毒という観点から“アグリガード”というものも開発し、病気やウィルスなどの感染前に、除菌消毒を行うことで、病気による植物栽培ロスを軽減しましょう、という取り組み商品を開発しております。

植木鉢の製造販売だけでなく、野菜の分野や切花の分野でも事業展開を行っておりますので、是非ご活用いただければと思います。



スリット鉢



アグリガードMAX

IPPS日本支部 第17回愛知大会へのお誘い

国際植物増殖者会議 (IPPS) 日本支部
第17回愛知大会 実行委員長

水谷 朱美

全国各地から様々な鉢物・花壇苗が集まってくる愛知県で、たくさんの方々とお会いできることを楽しみにしております。皆様のご参加を実行委員一同心よりお待ちしております。どうぞ愛知大会へお越し下さい。

日程

10月24日(日) 講演・研究発表	10月25日(月) 見学会(予定)	
9:00 受付	8:30-9:15 豊明花き市場セリの様子を見学	
10:15 開会式	Aコース	Bコース
10:30 特別講演 ①豊橋技科大三枝特任教授 「IT食農先導士」(仮題)	9:30 豊明花き市場 出発	9:30 豊明花き市場 出発
11:30 ②サントリー研究所 田中所長 「青いバラの開発」(仮題)	10:15 愛知県農業総合試験場 (果樹・花き)	10:15 早川園芸
12:30 昼食	昼食	昼食
13:30 研究発表	午後 イチジク生産者 大府「げんきの郷」	午後 兼弥産業(株) 知多「魚太郎」
16:30 総会 移動	16:00 名古屋駅にて解散	16:00 名古屋駅にて解散
18:30 懇親会 ホテルクラウンパレス知立		

参考宿泊先案内

大会本部では宿泊予約を承りませんので、各自ご予約下さい。

アイリスイン知立 (www.iris-inn.jp)	ホテルクラウンパレス知立 (www.crownpalais.jp/chiryu)
ホテルルートイン知立 (www.route-inn.co.jp)	
名鉄刈谷/金山 (www.m-inn.com)	

*大会と同時期に名古屋で世界生物多様性条約(COP10)世界会議の開催が予定されており、名古屋市内の宿泊は込み合うことが予想されますので、早めのご予約をお勧めします。

お問合せ先

株式会社ベルディ

TEL:0532-25-8712 FAX:0532-25-8486
E-mail:verde@verde-agribio.co.jp

IPPS-J 第七期理事・監事・役員・理事代理名簿 (2009.1.1~2010.12.31)				
	役職	氏名	担当	会社・所属
1	会長	内田 恵介		グリーンクラフト 代表
2	副会長	鉄村 琢哉		宮崎大学 農学部 准教授
3	副会長	鈴木 隆博	ホームページ	(株)浜松花き 代表取締役
4	事務・会計理事	南出 幹生		南出(株) 代表取締役
5	編集理事	富田 正徳		(株)アイエイアイ エコファーム部
6	国際理事	仁藤 伸昌	BlackBook	近畿大学 生物理工学部 教授
7	理事	大橋 広明	愛媛大会	愛媛大学農学部 生物資源学科 助教
8	理事	佐藤 伸吾	近畿大会	(株)花街道 代表取締役
9	理事	藤森 忠雄	ニュースレター	(株)赤塚植物園 執行役員常務 兼 社長室 室長
10	理事	水谷 朱美	愛知大会	(株)ベルディ 代表取締役
11	監事	柴田 勝		(株)王健 代表取締役
12	国際理事代理	Peter F.Waugh		Carann Managing Director
13	国際交流推進委員	大森 直樹	IPPS活性化	(株)山陽農園 代表取締役
14	年史編纂委員	武田 恭明		近江花学研究所 主幹
15	理事代理	青山 兼人		兼弥産業(株) 事業本部 取締役部長
16	理事代理	石井 克明		森林総合研究所 森林バイオ研究センター センター長
17	理事代理	遠藤 弘志	IPPS活性化	掛斐川工業(株) 池田工場農材部 部長
18	理事代理	弦間 洋		筑波大学 大学院 生命環境科学研究科 教授
19	理事代理	速水 正弘	IPPS活性化	静岡県西部農林事務所 園芸畜産課 主幹 花き専門

編集後記

今年は梅雨明け以降、大変な猛暑が連日続きました。人間は勿論、熱帯原産の植物以外は居心地の悪い夏の日々だったことでしょう。会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか。

今年の春、私は30平米程度の家庭菜園を借りました。5月の連休過ぎにナス、キュウリ、ニンジン、キャベツ、トウモロコシ、などの苗を植え付けました。梅雨明けまではそれぞれ順調に育っていたのですが、梅雨明け後の猛暑により、灌水が間に合わずに何本かの野菜を枯らしてしまいました。

しかし、野菜に比べ、雑草達の強健さは格別でした。灌水不足にもかかわらず、2週間も手入れに行かない間にひざ程まで伸び、花を咲かせて、種をいっぱい付け生き生きと育っていました。野菜は雑草の中で遠慮がちに育っていました。

自然の力は偉大ですね。このように人が開拓して、耕し野菜を植えた土地でも直に色々な種類の雑草を生やして原野に戻す力がありますね。如何に人間が畑を耕して、特定の植物を植えて栽培することが、自然にとって異常で、不自然なことか。改めて知らされました。

この家庭菜園の為に1万円ほどのお金を使いましたが、収穫はキュウリ約30本とナス約40ヶ程度でした。暑さの中で雑草とりに大変な苦勞をし、農家の仕事の大変なことを再認識させられました。同時に、自然の状態に戻そうとするバランス感覚の凄い自然の力に感動した今年の夏でした。

ニュースレター担当：藤森忠雄

ニュースレターへの原稿大募集

会員相互の情報交換の場として、このニュースレターをご利用ください。気軽に投稿していただければ幸いです。ご投稿を心からお待ちしています。

手書き文章はもちろん、CD、Eメールでも受け付けます。写真も大歓迎です。原稿内容は1ページあたり1,000字+写真2~3枚。顔写真をお忘れなく。

受付窓口

〒514-2293
三重県津市高野尾町1868-3
(株)赤塚植物園 藤森 宛
TEL 059-230-1234(代)
FAX 059-230-0576
E-mail ffctf@akatsuka.gr.jp